

香取市における千年村の地形立地と地名学的考察

高橋大樹*
宇田川大介**
梶尾智美***
桃井佳奈子***
木下剛*

1. 研究背景・目的

1) 千年村について

千年村とは、千年を超えて集落が存続してきた可能性のある地域のこと、地形・地質といった集落の基盤としての「環境」と、それに適応する集落の「構造」、またそこに展開される「コミュニティ」を三位一体のものとして捉え、地域を総合的に評価することを意図した概念である¹⁾。

2) 千年村の見つけ方

古代より続く集落を特定する方法として、角川日本地名大辞典から平安時代に成立した古代律令制における行政区画である国・郡・郷の名称を網羅した時点である『和名類聚抄』²⁾に記載されている地名を抽出した。また、抽出された記載地名をさらに角川日本地名大辞典の地名編で検索し、各郷名の説明文から現在における場所を特定した。この方法は早稲田大学建築史学研究室中谷礼仁らの研究グループが考案したものである。

3) 研究目的

上記の方法を用い比定すると、千年村の比定地は現在の地名で複数考えられることがあり、千年村の明確な範囲を決定する上での判断材料がまだまだ不足しているといえる。そこで、本研究では現在の千年村の地形立地を地名から考えられる地形との整合性の考察を行うことで千年村の比定地の立地妥当性を高めることを目的とする。

2. 研究対象地

現在調査中である千葉県全千年村89か所の中でも独自の歴史的な文化や利根川沿いの特徴的な地形立地にある香取市の4か所13地区の千年村を対象地とした。

表－1 香取市の千年村

郡名	郷名	現在の町名
香取郡	香取郷	香取・新市場・多田・佐原・篠原
	大槻郷	返田・大根・下小野・織幡
海上郡	大倉郷	大倉
	城内郷	木内・山川・白井・八本

*千葉大学大学院園芸学研究科 **東海大学大学院文学研究科

***千葉大学園芸学部

3. 研究方法

1) 千年村の地形立地の把握

客観的に地形の分析を行うために、1/25000の土地条件図を元に香取市の全千年村（現在の町名）の地形立地の把握を行う。比定された地区の中でも細かい地形の違いがあるので、その地区内で集落が形成されている場所周辺の地形を比定地区地形とした。また近年の住宅開発の影響からかつて集落の位置が現況の地図では把握しづらいので明治初期の1/20000迅速測図を用い古くから存在する集落位置の確認を行った。

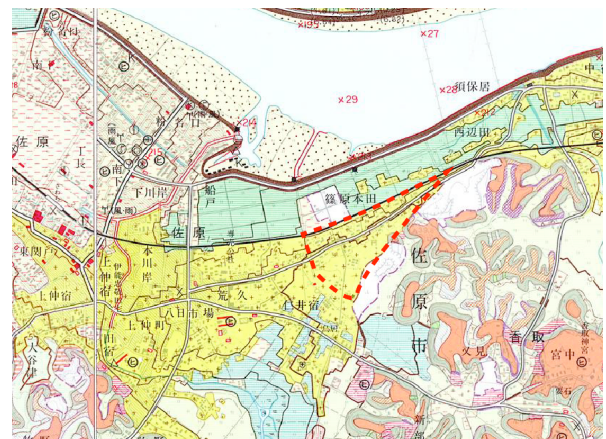


図-1 1/25000の土地条件図（潮来） 香取郷篠原地区

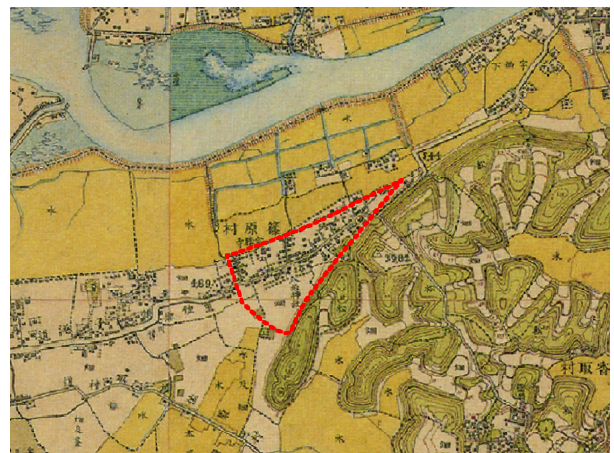


図-2 明治初期1/20000の迅速測図 香取郷篠原地区

2) 地名学的検証

『地名用語語源事典』³⁾を元に比定された千年村の郷名、現在の地名の語源について調べ、地名を元に考えられる地形についてまとめた。また、地名が特に地形を表してなく別の意味が語源とされる場合、今回の研究対象としないとする。

3) 現地調査を踏まえた総合的考察

1)と2)と現地調査から現在の千年村の地形立地と地名との整合性を考察する。より整合性が高いものは地形立地の妥当性が高いと考えられる。

表－2 地形立地と地名の整合性

郡名	郷名	現在の町名（フリガナ）	現在の地形分類	地名からの考察	地名から考えられる地形	現地形との整合性
香取郡	香取郷	香取（カトリ）	台地上位面	「カトリ」は自然堤防を表す語、「リ」は場所を表す接尾語。 ＝「自然堤防のある一帯」か	自然堤防上	×
		新市場（ニイジバ）	台地上位面	「ニイ」は「ニュー」と同じく「粘土」、「ジバ」は「チバ」と同じく 「台地などの端」＝「台地の端の粘土質の場所」		
		多田（タダ）	台地上位面	「タダ」は「濡れる」の語幹と同じで「崩壊地形」、 また「膨れた地形」「重なった地形」をあらわす「タタ」の転訛か		
		佐原（サワラ）	自然堤防上	「サハ（サワ）・ラ」で「湿地帯の場所」または 「サ・ハラ」で「（利根川沿いの）小さい平地」の意味か	自然堤防上	○
		篠原（シノハラ）	自然堤防上	「シノ」は「湿地」を表す ＝「湿地帯になっている平地」	自然堤防上	○
	大槻郷	返田（カエタ）	台地上位面	土地が高く水を汲みこまなければならない 水田を表す「カエタ」の転訛か	台地上位面	○
		大根（オオネ）	台地上位面	「オホ（オオ）」は「大規模、大きい」、「ネ」は「丘陵地、山」 ＝「大きい山（のふもと）の地区）」	台地上位面	○
		下小野（シモオノ）	台地上位面	「ラ（オ）」は「丘陵地の山すそ、尾根」 ＝「丘陵地に続く原野」	台地上位面	○
		織幡（オリハタ）	台地上位面	「オリ」は「降りる」と同語源で、「ハタ」は「（台地などの）端」 ＝「台地の端を降りたところ」か	台地上位面	△
海上郡	大倉郷	大倉（オオクラ）	台地下位面	「オホ（オオ）」は「大規模、大きい」、「クラ」は「崖」 ＝「大規模な崖のある地域（の下の集落）」か	台地下位面	○
		木内（キウチ）	台地上位面	「キ」は「割れ目」または「鋭く尖ったもの」の意、 「ノ」は接続詞の「の」、「ウチ」は「内側」		
	城内郷	山川（ヤマカワ）	台地下位面	「ガワ」は「傍、脇」にあたる言葉。 ＝「台地が尖ったところの内側」または「台地の割れ目の内側」か	台地下位面	○
		白井（シライ）	台地上位面	「シライ」は「緩い傾斜」を表す「ヒラ」の転訛、 「イ」は集落＝「緩い傾斜上の集落」か	台地上位面	○
		八本（ハチモト）	台地上位面	「ハチ」は「削られたような地形」「端」の転訛、本は「モト」が 音読みで転じたものか＝「削られた地形か台地の端のふもと」の意味か	台地下位面	×

凡例 地名から考察できない地形

4. 結果

1) 現在の比定地区の地形立地について

表2より香取市の千年村の多くが台地上位面、つまり台地上の平坦地に見られた。また利根川沿いの自然堤防上にもいくつか地形立地見られた。一方、千葉県他の千年村で多く見られた台地下位面、つまり台地と低地の際に立地する集落はあまり多く見られなかった。これは香取市の地形の特質として台地上の平坦地の面積が広く、台地の際部ではなく台地上位面に集落が多く形成されたためと考えられる。

2) 地名学的検証

地名によって表現は様々であるが、やはり地形を示すものが多く見られた。また地名から考えられる地形では台地上位面のみならず台地下位面を表すものもいくつか見られた。一方、台地の端の粘土質の場所という地名の意味を持つ「新市場」や崩壊地形という意味を持つ「多田」などは地名から推定される意味が特殊な地形を表しており、現在の地形立地との整合性の考察を行うことはできなかった。より詳細な現在の地形・地質の調査がないと地名との整合性がとれない。

3) 現在の地形と地名の整合性

整合性が高くみられた地区として、香取郷佐原地区・篠原地区、大槻郷返田地区・大根地区・下小野地区、大倉郷大倉地区、城内郷山川地区・白井地区が挙げられる。特に大倉郷大倉地区には現地調査などを通じて、地名から考察できる大規模な崖が見られ、地形立地と地名との整合性が高く確認できた。このような点からみても地名と地形には密接な関係があり、地域性を表現する一つ方法であるといえる。

5. まとめ

現在の地形立地と地名から考えられる地形の整合性がとれている比定地区が多く、今回検証した14地区のうち8地区が地名的にみても地形立地の妥当性が高い地区であるということが概ねいえる結果となった。

しかし、一方で地名的には台地下位面を表しているが実際の現在の地形では台地上位面であるパターンみられた。これに該当する地区として大槻郷織幡地区、城内郷八本地区がある。現地調査でもこの二つの集落は台地上位面で確認ができた。これら集落はかつて台地下位面で集落を形成していたが、利水技術・農業技術の発展や台地上での飲料水の確保ができるようになり、より平坦で水害などの被害がない暮らしやすい台地上位面へ集落を移転した可能性が考えられる。今後、現地詳細調査での文献資料や郷土史を分析することで明らかにしていきたい。

補注・引用文献

- 1) 千年村の調査研究は、早稲田大学建築史研究室の中谷礼仁を中心に組織された研究グループにより、文化庁の助成研究「文化財の確実な継承と地域活性化活用のための防災指針の作成と普及」（座長：長谷見雄二）の一部として開始され、本研究も同助成を受けて実施した。東北地方の千年村の所在地同定とその存続条件に関する調査を端緒として、その後、筆者らの研究室も参加して千葉県内の千年村に関する同様の調査を行ってきた。現在、関西地方の研究者らの参加も仰ぎ、全国の千年村の所在地同定を開始したところである。詳しくは以下のウェブサイトを参照のこと。http://rhenin.wordpress.com/2011/09/16/古凡村調査開始（文化財の確実な継承と地域活性化/
- 2) 931-938年、源朝編纂とされる日本初の漢和辞書。古代律令制における行政区画である国/郡/郷の名称を網羅している。
- 3) 地名用語8000を収め、その意味や語源を科学的に解明し大半の地名の語源を判別することができる。